

植物と過して

東京大学 大学院農学生命科学研究科 附属緑地植物実験所 技術職員

石川 祐 聖

私は平成16年に園芸別科花卉専攻を修了して、現在は東京大学の技術職員として緑地植物実験所という施設に勤務しています。

緑地植物実験所は‘大賀蓮’の種子が発掘された事で有名な千葉市の花見川区にあります。多数の花蓮コレクションと椿やツツジ等の樹木が植栽されており、緑地としての機能を持つ施設です。子供の頃から植物に携わる職業に就きたいと考えていたので、現在の職に就けた事は本当に嬉しく感じています。

この度『花葉』への執筆依頼をうけて、お世話になった方々への感謝と共に、現在まで経験した業務と出会った植物について、書きたいと思います。

東沢バラ公園にて

別科を修了して初めての勤務地は、山形県の村山市にある東沢バラ公園でした。4年間という勤務期間でしたが、社会人として一から業務を指導していただき大変お世話になりました。

東沢バラ公園は、その名の通りバラを主体とした緑地公園で、山に囲まれた約7ヘクタールの敷地に750品種、約2万株のバラが植栽されており、オリジナル品種である‘むらやま’など他では見る事の出来ない品種も



東沢バラ公園

あります。春と秋には「バラ祭り」が開催され、時には結婚式の会場にもなる美しい公園です。私が行っていた公園での業務は植栽植物の維持管理が主で、1年を通じたバラの管理は実務ならではの大変さと発見があり、とても勉強になりました。

特に春の剪定と冬の雪囲い作業は、印象に残っています。もちろん咲いた花を見るのは楽しいのですが、剪定も雪囲いもその花を咲かせる上でとても重要な作業です。4月からの勤務でしたので、初めてバラに触れたのも剪定作業でした。2万株のバラを5名ほどの人数で剪定するのですが、冬の積雪が多いため雪解けに時間がかかります。必然的に作業の開始時期も遅くなるのですが、バラが生育を始める前に作業を終える必要があるため、20日ほどで剪定を終わらせなければなりません。それには正確さは勿論のこと、かなりのスピードが要求されます。

バラを育てた事のある方はご存じかと思いますが、剪定にはいくつかポイントがあり、良い外芽を残す事と高さを抑えて揃える事が重要です。この2点をおさえた上で不要な枝を除いていくわけですが、初めの頃は枯れ葉や雪囲いで使用した縄が邪魔して枝がよく見えず、なかなか狙い通りには剪定できませんでした。作業を指導して下さったベテランの職員の方が、雪囲いを解きもせずに剪定をしているのを見た時はとても驚きました。まるで、初めから剪定後の形が分かっているような迷いのない剪定でした。植栽面積が広いので、剪定の後に全体を見渡すと整然とした美しさがありました。それを見ると開花時期を待たなくとも「今年もよく咲くな」と言う事が分かるようで嬉しくなったのを覚えています。

開花期は、たくさんの来園者の方で賑わい、あっという間に過ぎて行きます。そしてバラが休眠期に入る頃から雪囲い作業が始まります。これはバラを寒さから保護すると共に積雪による倒伏や枝折れを防止するための措置ですが、東沢バラ公園の場合は積雪が1m以



オリジナル品種「むらやま」

上あるため、かなりしっかりと固定する必要があります。1株につき3本の竹杭を使って固定していくのですが、2万株あるバラだけで6万本の竹杭を使用することになります。その他にも細木や板、それらを固定する縄の量は「本当に使いきれのか」と思うほど膨大です。作業は10月に開始して雪に追われながら12月半ばまで続きます。バラにとって剪定が始まりの作業だとすれば、雪囲いは1年を締めくくる作業になります。1株ずつ縄で縛っているとその年の生育状況が感じられ、雪囲いの作業が終わりに近づくにつれてその年に行った全ての作業がまとめ上げられていくようでした。

公園の管理業務は、剪定と雪囲い作業の他にも薬剤散布や除草、時にはキャンペーン活動など、多岐にわたります。特に少人数で作業をこなそうとする場合は、全ての作業を年単位で把握する必要があります。また、決められた時期に花を咲かせるには、その年ごとの微妙な気候変化を予測しなければなりません。これは経験の積み重ねと土地の性質とを知って初めて実行可能であり、知識だけでは決して出来る事ではありません。4年間の勤務で全てを習得出来たとは到底思えませんが、当たり前のように花を咲かせる事の難しさ、公園を次の世代へ伝えていく事の大変さを学べた事は、貴重な体験だったと感じています。

緑地植物実験所から

現在の勤務地である緑地植物実験所には、初めにも書いた通り多数の花蓮コレクションがあり、200品種を超えています。「花蓮」とは読んで字の如く花の観賞を目的とするハス品種の事で、私にとっては緑地植物実験

所に勤務して初めて出会う言葉になりました。千葉大学園芸学部のキャンパスにも大きな水鉢にハスの花が咲いていたのを記憶していますが、花としてハスを見る機会は他の園芸植物と比べると少ないのではないのでしょうか。花の咲き揃う7月には町のイベントである「観蓮会」の会場として開放され、早朝から短い時間にもかかわらず数千人の見学の方が訪れます。1ヶ所でこれだけ多くの品種を観察できる場所は国内でも少ないため、写真家の方にも人気の場所になっています。花蓮の知識がほとんど無かった私ですが、今年4月からの勤務で知ることになった新しい世界を紹介したいと思います。

花蓮の栽培は鉢とコンクリート枠で行っているのですが、種類が多いため圃場には大型の品種から小型の茶碗蓮まで500以上の鉢が並んでいます。大型品種の葉は雨傘のように巨大で、花は30cmほどにもなります。小型品種は10号鉢程度の容器で栽培でき、10cmほどの花が咲きます。花色は紅色・桃色・黄色・白色が基本で、黄色品種との交雑によって黄色みを帯びる品種も作出されています。花卉先端の色が濃い「爪紅」や白地に紅色が入る「斑蓮」など実に多彩な表情があります。一重だけでなく八重品種もあり、雄蕊や花托などが全て花弁化した千弁蓮は花卉数が数千枚にもなります。またメントール系の甘い芳香もあり、広い面積で栽培すると幻想的な雰囲気でもとても魅力のある植物です。

花蓮の維持管理は、植え替えから始まります。毎年新しい蓮根ができるため鉢栽培の場合は根詰まりを起こしやすく、前年の蓮根と共に腐敗してしまう事があります。そのため、2～3年に1度は植え替える必要があります。用土は赤土を使用し、元肥と水を加えて攪拌



緑地植物実験所ハス圃場

したものに2~3節分の蓮根を植え付けます。花蓮の蓮根は、食用の品種と比べるとほっそりとした形状をしています。5月上旬には萌芽し始め、初期に展開する葉は水面に浮いている事から「浮き葉」と言い、その後水面から立ちあがって展開する「立ち葉」が出ます。立ち葉と共に出蕾し始め、6月上旬から9月下旬まで花が楽しめます。適時追肥と薬剤散布を行うのですが、ほとんど病気にはかからず、アブラムシやケムシ類に対して殺虫剤を散布しています。特に生育初期の浮き葉を食害するユスリカの幼虫には注意が必要で、ほっておくと後の生育に大きな影響を及ぼすばかりか枯死してしまう危険性があります。生育の後期になると「止め葉」と言われる葉が展開し、その後休眠に入ります。

維持管理と並行して品種のデータベース整備も行っています。ハスは、国内だけでなく、主に中国で広く栽培されている他、オーストラリアやロシア、アメリカにも分布しており、国外の品種も多数存在します。古くから栽培されてきた植物であるため、野生種と品種の境が曖昧になっており、種子で繁殖した個体や導入元の分からない品種については確認が必要です。

例えば、大賀蓮は一重の紅色であるはずが「白色の花が咲いた」などの問い合わせがあります。おそらく自然交雑した種子が発芽して開花したか、ほかの品種と混在して大賀蓮の方がなくなってしまったことが原因と考えられます。このように誤った品種が流通してしまう危険を避けるためにも、品種のデータベース整備は大切な作業になっています。

品種を維持するためには、導入元のはっきりした蓮根を植え付け、種子繁殖を避けるために種子が落ちる前に刈り取るなどの管理が必要です。他の品種が混在してしまった場合は、任意の品種を掘り出して植え替える必要があります。このような栽培上の注意を認識することも大切だと思います。

美しい花を咲かせる花蓮ですが、花卉として栽培した場合いくつか課題があります。まず限られた面積で栽培すると、腋芽があまり生育せず頂芽だけが伸長するため全体的に節数があまりふえません。そのため同時に複数の花を開花させることが難しく、開花時期を揃える事が課題となっています。植え付け時に蓮根を密植ぎみにする、時期を見て頂芽をカットして腋芽の生育を促すなどの栽培法をこれから試してみたいと考えています。

切り花にした場合は、水揚げの悪い事が問題になっています。これは葉に関しても同様で、出荷がとても難しい植物という事になります。また、花卉が開閉を繰り返す植物のためうまく開かずに萎れてしまう恐れがあり、適切な出荷方法を確立する必要があります。

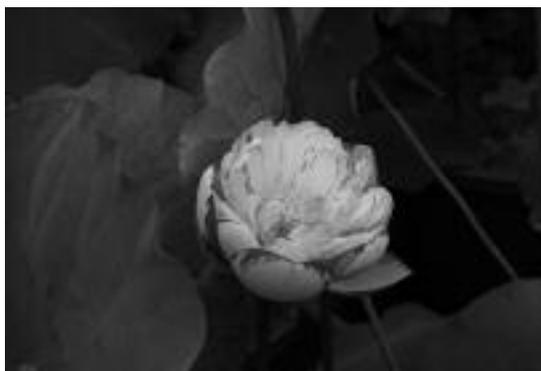
鉢物とした場合は、用土が水を多く含んでいるため重くなってしまふ事や移動時の衝撃に弱いなどの問題があります。花つきの良い品種もまだ少ないため、育種にも取り組んでいきたいです。

開花日を調査してみると品種によって開花期に差があり、3ヶ月ほど咲き続ける品種から1ヶ月ほどの品種まで様々です。大賀蓮は、早咲きですが比較的花期の短い品種で、そのため花数も少なくなります。このような品種に遅咲きの品種を交配することで花期の長い品種ができないかなど、交雑種の調査を進める事でより花卉として利用しやすくなると考えられます。

ハスには長い栽培の歴史がありますが、まだ花卉としての認識は薄く栽培技術や生態についても不明な点の多い植物です。これから花蓮として広く利用される植物になるよう、努力を続けて行けたらと思います。

これからについて

緑地植物実験所での業務は、温室の管理や観葉植物のレンタルなど、花蓮に関してだけでなく初めて体験する事がたくさんありました。これから出会う業務もまだまだありそうです。植物園や演習林の方と知り合う機会も増え、以前にも増して多くの事に挑戦できる機会を得ることが出来たと感じています。植物について1つでもやり遂げたと感じる日が来るように、これからも頑張っていこうと思います。



斑蓮 '大酒錦'